http://decfamily.p1.bindsite.jp/2016/

We 13R

No.164　17/01/31

ピアノの話

ピアノ・メーカーといって浮かぶものがある？　ヤマハとか、河合とか？　世界的にみると、スタインウェイ＆サンズとか、ベヒシュタイン、ベーゼンドルファーが御三家と称されているらしい。ただし、生産量ではヤマハと河合が世界１・２位を争っているというから、一大ブランドといっても過言ではないだろう。

そんな中、1981年に創立されたイタリアのメーカーが気炎を吐いているらしい。そのメーカーはファツィオリ。パオロ・ファツィオリが、自分の理想とする音を求めて自ら創業したメーカーで、2010年のショパン・コンクールでは、公式ピアノとしてファツィオリを選んだ４人のうち２人が入賞するという快挙を成し遂げたそうだ。で、その調律を任されているのが、なんと日本人（越智晃さん）なのである。以下、引用しよう。

＊

越智さんとファツィオリの出会いは、今から10年ほど前。実は当時越智さんは、別の老舗メーカーに勤務する調律師でした。が、ある時、仕事仲間であり、後にピアノ・フォルティ社（楽器の輸入代理店）の代表となるアレック・ワイル氏に誘われて、軽い気持ちでイタリア北部にある同社の工房に赴いたそうです。

「厚かましくも、メインの楽器であるコンサートグランドを調律させてほしいと言ってみたら、あっさり一台与えてくれたんですよ。老舗メーカーであれば絶対アジア人にフルコンサートなんて扱わせないので、まずそこで驚いた。次に、実際に作業して１オクターブ仕上げてみた時、出てくる音にハッとさせられたんです。「あれ、こんな音、うちのピアノじゃ出てこないぞ」と。」

越智さんは、ピアノを習っていた小学生の頃に調律師という職業を知り、「自分でもやってみたい！」とお小遣いをためて道具を買ったという逸話の持ち主。以来、その夢を叶えるべく努力を積み、音大の調律専科修了後すぐに老舗メーカーの仕事に就きました。当然、彼の中では、そのメーカーの音色がすべての基準だったのです。

「僕が頭のてっぺんから爪先まで信じ切っていた老舗の音を超えるような楽器が、自分の知らないうちに生まれていた。それは大きなショックであり、人生の中で重要な一瞬でした。夢中になって一台仕上げて、パオロに試弾してもらったら、すごく喜んでくれたんです。そして、５年前に製造した別のピアノの音を効かせてくれたのですが、そのピアノの方が音の伸びが良く、響きが長く残ったんですね。その音を「これが５年という時間がつくった音だよ」と彼は言った。あぁ、この人は本当に楽器が分かっている人だ、絶対にピアノの歴史に残る人だと確信して、一緒に音作りをしたいと、痛烈に思いました。」

（SIGMA Belief「SEIN」vol.11より）

＊

老舗メーカーを辞めて、小さな会社に飛び込むにあたっては、越智さんには相当葛藤があったようだ。しかし、「自分が調律師になったのは、そのメーカーが好きだからではなく、ピアノが好きだからだ」という単純な、しかし一番大切な事実を思い出し、ファツィオリに飛び込むことを決意するのである。